

本間 栄教授送別の辞

伊豫田 明

東邦大学医学部医学科，外科学講座呼吸器外科学分野（大森）教授

本間教授は、1979年に順天堂大学をご卒業され、同年自治医科大学にて内科研修を開始、1985年に順天堂大学大学院にて学位を取得、1988年米国Harvard大学病理学科、公衆衛生学科へResearch fellowとして留学、1992年に順天堂大学医学部呼吸器内科講師、1994年より国家公務員共済組合連合会虎の門病院呼吸器センターに赴任され、2005年より同センター内科部長としてご活躍されたのち、2006年東邦大学呼吸器内科主任教授として赴任されました。

赴任後は本間先生のライフワークである間質性肺炎を中心としたびまん性肺疾患、肺癌、慢性閉塞性肺疾患、呼吸器感染症、睡眠時無呼吸症候群など呼吸器疾患全般を網羅する診療体制を構築され、現在では教員10名、日本呼吸器学会専門医18名を抱える都内でも有数の呼吸器内科学講座に育て上げられました。

さらに平成26年には睡眠時呼吸障害センター、平成29年からは、我が国大学初の間質性肺炎センターを併設し、当センターを拠点とした活動ならびに啓発活動を全国展開されています。院内業務としては、長年薬事委員会委員、新内科専門医制度プログラム統括責任者、内科チェアマンを務め、病院運営に貢献されました。

医学部運営につきましては、3年次部会長、OSCE運営委員会委員長、臨床実習前統合演習運営委員会委員長、集中臨床講義運営委員会副委員長などを歴任され、医学部学生および大学院生への教育や研究活動でも大いに貢献された結果、本間教授ご指導のもと、20名以上が医学博士を取得されました。

学会活動では日本呼吸器学会理事、日本サルコイドーシス/肉芽腫性疾患学会副理事長をはじめ日本内科学会、日本肺癌学会、日本結核病学会、日本呼吸器内視鏡学会、日本呼吸ケア・リハビリテーション学会など、呼吸器関連学会の評議員、各種委員、学会会長を務められ、特に日本呼吸器学会では、びまん性肺疾患学術部会長、肺移植検討委員会委員、ガイドライン施行管理委員会副委員長、第38回生涯教育講演会会長など呼吸器病学の発展、後進の育成に

多大な貢献をされました。さらに、2014～2016年度には厚生労働科学研究費補助金難治性疾患等政策研究事業「びまん性肺疾患に関する調査研究」班代表研究者、日本医療研究開発機構研究費（難治性疾患実用化研究事業）「びまん性肺疾患に対するエビデンスを構築する新規戦略的研究」班代表研究者として、日本全国の著名な研究者をまとめられ、その間、ATS/ERS/JRS/ALAT IPF Guideline Committee Member、特発性肺線維症の治療ガイドライン2017作成委員会委員長、難治性びまん性肺疾患診療の手引き作成委員会委員長として、びまん性肺疾患に関する我が国独自の研究成果を短期間でまとめあげて世界に発信し、たくさんの研究業績を積み上げられた結果、特発性肺線維症の治療を大きく前進させました。

受賞歴として上原記念生命科学財団留学助成金・研究奨励金授与、厚生省公益信託岡本敏記念肺線維症研究基金授与、2006年、2017年Award of the Asian Pacific Society of Respiriology獲得、公的研究費獲得にも積極的に取り組み、毎年の学術振興会科研費に加えて、ご自身でも平成26～28年度には総額1億4千万円の厚生労働科学研究費を獲得するなど、本学の研究活動にも大きな足跡を残されました。

先生のすべてのご業績を書くにはあまりにもスペースがなく、ほんの一部を書かせていただきました。ここまでの体制を作るには、相当な労力が必要であったと思われますが、そのことを微塵も感じさせない本間先生のお人柄に、多くの医局員が魅了され、毎年多くの新入医局員が入局しています。現在数少ない呼吸器の専門家を輩出する施設として、益々周囲の期待は膨らむばかりであり、今後間質性肺炎センターの発展も大いに期待されています。まだ多くの医師が先生に学ばせていただきたいことがたくさんあると思っておりますので、引き続き本間先生におかれましてはご指導、ご鞭撻を頂けますよう、よろしく願いいたします。

先生の今後の益々のご活躍とご発展を祈念いたしまして送別の辞とさせていただきます。